慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「教会装飾におけるロジック」 : Logic in church decoration
Sub Title	
Author	遠山, 公一(Toyama, Koichi)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	活動報告書 Vol.2, (2008.) ,p.45- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20090300-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

8 「教会装飾におけるロジック」
Logic in Church Decoration

開催日　2008年11月4日
企画班　哲学・文化人類学班
企画者　遠山公一
講演者　Julian Gardner、Christa Gardner von Teuffel (University of Warwick)

去る11月4日、東館6階にて、美術史グループの企画によって講演会が催されました。お招きしたのは、イギリス、ウォーリック大学のガードナー夫妻です。ウォーリック大学は、イギリスでは珍しく1960年代に設立された新しい大学ですが、たちまち同国を代表する大学に成長し、今日ケンブリッジ・オックスフォードに続く地位を確立しています。夫ジュリアン・ガードナー教授は、大学設立時当初からのメンバーであり、同大学の文学部長を務められました。また、アメリカやイタリア各地の大学にも呼ばれて教鞭を執っています。専門はイタリア12－14世紀の美術研究で、イタリア中世美術の国際的な会議になくてはならない世界的な権威です。

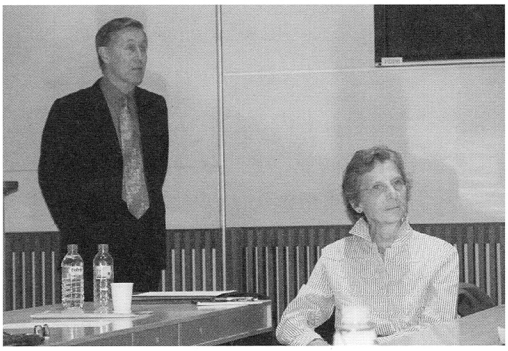
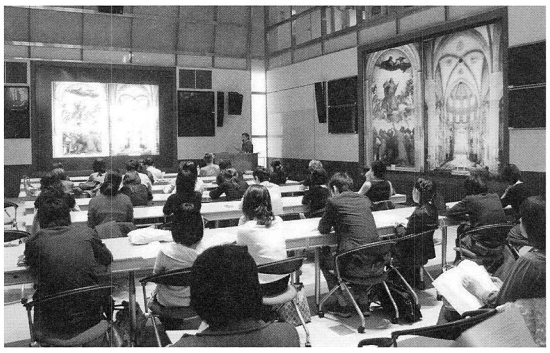
一方、妻のクリスタ・ガードナー・フォン・トイフェル女史は、イタリア15－16世紀美術史研究に携わり、イギリスやイタリアの各大学や専門機関において、近年精力的に研究活動・発表を展開しています。この講演を企画実行した遠山とは、シエナの画家サセッタ作《サンセポルクロ祭壇画》に関する著作を、共著にてハーヴァード大学から今年刊行する予定です。

講演は、東館6階にて「教会装飾におけるロジック」と題されて行われました。キリスト教における聖堂は、歴史的に見て複数の役割を担ってきましたが、その第一の目的が多数の信徒を祭壇の前に集め、ミサを挙行することであることは言うまでもありません。集団的礼拝行為であるミサは聖体拝領を中心に、細かく定められた典礼に基づいて執り行われます。司祭が位置する祭壇、あるいはその周辺では、祭壇画を掲げ、聖歌を歌い、香を焚くなど、言葉による典礼のみならず、五感に広く訴えて会衆の注目を集めることを目指しました。美術史に関わるものとしては、当然祭壇装飾、なかでも祭壇画が重要です。今日、我々が美術館などで見る大型の宗教画の大半が実はこの祭壇画（の一部）であります。ガードナー夫妻は、特にこの祭壇画の分野で目覚ましい研究成果を次々に世に問うておられるのです。

最初にクリスタ女史がお話しされ、主祭壇とオルガン装飾との関わりについて持論を展開しました。歌と共に音楽を奏でる手段として、聖堂内のオルガンという楽器は、歴史的に見て極めて重要な存在であり続けました。その巨大なパイプ・オルガンを収納する容器には普通開閉式の扉がつけられており、そこには絵が付されることが多くありました。その絵と主祭壇画とは、作者が同じであったり、スポンサーが同じであったり、また図像上の関係が推定される可能性があり、普通結びつけられることがない両者の間の関係について考察する重要性を指摘されました。

次にジュリアン・ガードナー教授は、様式論の限界について語った後、むしろ祭壇（画）をめぐる様々な機能という側面から論じる可能性について述べられました。そして、個人の墓、聖遺物や巡礼あるいは典礼との関わりを、多くの作例を挙げつつ縦横に語ってくださいました。そこには、合理性をもって考えるべきロジックが存在し、美術史においてはそのロジックを歴史的に跡づけて、祭壇画という造形的な装飾物について再考する必要があるとされます。ガードナー教授は、これを平易な英語で明確に語ってくださいました。

当日は、塾内外から数十名ほどの聴衆が集まりました。司会による紹介から講演・質疑応答まで、事前にテクストやレジュメを配り、すべて英語（一部イタリア語）で通訳なしで行われましたが、複

数の専門家の間で、活発な質疑が交わされ、現在の美術史研究をリードしている研究者を迎えたこの貴重な機会を、多くの聴衆は満喫したのではないかと思います。講演後の懇親会の席上でも、ガードナー夫妻は参加者一人一人と話され、また院生の指導にも多大な時間を割いてくださるなど、夫妻の教育的な配慮に一同感激した次第です。

（遠山公一）